

記紀万葉などが皇国史観の史料的な裏付けとされたこともあって、それらさえあれば日本の古代は十分に説明可能であるという考えが培われており、これは皇国史観を批判する戦後の史観にもそのまま受け継がれてきた。だが、考えてもみよ。『日本書紀』に明記されているように**蘇我氏が滅びたときに、『天皇記』や『国記』などの記録を焼いた**とある(皇極天皇4年6月)。これらの書物がもし現在も伝わっているとすれば、日本の古代史が一変していることは疑問の余地がない。今日私たちが読むのとははなはだ異なった古代の通史が書かれていることになったはずである。にもかかわらず、現存の記録を相手として研究する史家はいつしかそれだけが与えられた記録であるという考えを持ち始め、それだけで必要かつ充分であるという錯覚に陥る。そこで与えられた記録の中だけで推理し、また理屈をつけるようになる。これは極めて危険なことではあるまいか。

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記URLをクリック)に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>